

## 祝辞

宮城県における、新型コロナウイルスによる感染拡大は依然として高止まりしており、大変心配しておりましたが、宮城県仙台第二高等学校における、令和四年度、第七五回入学式が、ここ講堂において、無事挙行されることとなり、胸をなで下ろしております。

栄えある今日を迎えた新入生は、男子一七〇名 女子一五一名、合計三二一名とお聞きしております。宮城県仙台第二高等学校同窓会を代表いたしまして、新入生の皆さんにお祝いを申し上げますと共に、今日を待つておられた保護者の方々に対しても衷心よりお祝い申し上げます。

世界は、時間と空間が狭まり、新型コロナウイルス感染者増加は、まさに「グローバルな地球社会」そのものを、マイナスの意味で、あからさまに示す、結果でもあります。さらに、ロシアのウクライナ侵攻も加わり、わたしたち一人ひとりが向き合わざるをえず、「ローカルな地域社会」においても、その日常生活に響いてきております。このような地球社会の問題を克服するには、わたしたちはどのようにこれから生きてゆけばよいのでしょうか。

歴史を振りかえれば、明治維新後の日本は、その当時のアメリカ、ヨーロッパによる「グローバルな地球社会」に参加せざるをえず、西洋化、文明開化が叫ばれた時代でした。その明治三三（一九〇〇）年、本学、すなわち宮城

県第二中学校は設立され、一昨年、令和二（二〇二〇）年、創立百二〇周年を迎えております。

昭和三七（一九六二）年、すなわち六〇年前に仙台二高に、わたくしは入学しています。その後、東京藝術大学絵画科油画専攻に入学し、昭和五六（一九八二）年、東京藝術大学絵画科油画専攻の教官となり、足掛け三十四年間、油画実技、絵画材料、絵画技術を、教育、研究してきました。今日は、趣を変えて、「シルクロード（絹の道）」に位置するアフガニスタンでの、わたくしの特異な経験の一端を交えて、お話ししようと思います。

平成一三（二〇〇二）年三月、タリバーンによる「バーミヤーンの大仏破壊」があり、五世紀から六世紀に彫像建立された、高さ五五メートルの西大仏が瓦礫となり、その内壁の壁画も多数剥ぎ取られ、世界各国に売り飛ばされてしまいました。その年の九月一日、「アメリカ同時多発テロ事件」が起こり、アメリカと同盟国はタリバーン政権に対する空爆を開始し、一二月二二日には暫定政権が樹立されました。

バーミヤーン仏教遺跡の破壊活動に対して、わたくしは義憤を感じ、その一年半後、アフガニスタンのカブール空港に降り立ちました。文部科学省が呼びかけた「アフガニスタン文化教育支援活動」に応募して、カブール博物館の館員たちに文化財保護活動の基本として、所蔵品の惨状をしっかりと画像と文章で記録する方法の講習会を開きました。

カブール空港の滑走路の端に、飛行機の残骸が幾重にも重なっており、空港ビームも砲弾の痕跡がも生々しく、ホテルへの入口では、送迎車に地雷が付着していないか厳密に検査が行われ、ホテル内部も砲弾による痕跡がそのまま残されていました。カブール博物館の二階は、屋根と壁が吹き飛ばされ、

柱が林立しているだけでありました。所蔵されていた仏像塑像はことごとく原型を残さず破壊され、これから修復作業といっても、破片をパズルのごとくつなぎ合わせなければならず、絶望的な気持ちになりました。

カブール大学を訪れ、学長と面談をし、文化財保存の重要性を知らしめるため、鎌倉、京都、奈良の古美術の保存活動の実態と、東京藝術大学での保存修復の教育と研究の一端を实地に経験してもらおうと、招聘したい旨を伝えました。翌年、ユネスコ青年交流信託基金プログラム「アフガニスタン文化遺産保護研究に関わる人材育成研修」としてカブール大学、ヘラート大学の教員、学生、合計一〇名を招待しました。

アフガニスタンの国土はほとんどが黄土色で、わずかなオアシスに緑色が認められるだけです。黄土色の粉塵が風で煽<sup>あお</sup>られ、一日でわたくしは気分が悪くなり、歩き動くのが億劫になり、発熱もありました。カブール市内に日本人医師がいるといわれ、バラックのような診療所に行きました。医師曰く、「初めてアフガニスタンにきた人は、必ずこの風土にやられるんですよ。なにに、なんの心配もありません」と。翌日には、ケロツと治りました。

この医師が、令和元（二〇一九）年に凶弾に倒れた中村哲さんでした。山を駆け巡り、昆虫採集少年であった中村医師は、現地での医療活動に加えて灌漑事業を行い、『人は愛するに足り、真心は信ずるに足る』として、砂漠を緑化するプロジェクトを黙々と実行していたのでした。

もう一人、緒方貞子さんがいます。同年、令和元（二〇一九）年に亡くなっております。少女時代、お転婆で、走り回っていた彼女は、アメリカ留学時に、日本の第二次世界大戦への道を決定づけた『満州事変』を研究をしていました。平成一三（二〇〇一）年以降、第八代国連難民高等弁務官として、アフガニスタンの国づくりを支援し、人間、一人ひとりの安全に焦点を合わ

せる安全保障観を提唱しております。

ややもすると、「グローバルな地球社会」では、国家間の覇権主義が横行し、その結果「ローカルな地域社会」が踏み躪<sup>にじ</sup>られ、多数の難民が発生しております。このようななか、中村哲、緒方貞子という日本人の生き方を、われわれも引き継ぐことができないでしょうか。

仙台二高での、これからの三年間、怠らず、怠らず、勉学に、スポーツに、仲間と一緒に、真摯に励んでください。そのように集中すると、普段気づけない、心の奥深くにある本来の「自分自身、自己」の姿を発見してしまうのです。そのような心の声を聞くことができないと、「自分自身」の、氷山の一角に過ぎない、表面に見出される「自意識、自我」に頼ることになります。そうになると、短絡的に結果を求める、たとえば偏差値至上主義や、極端な拝金主義も生まれてしまうのです。

宮城県仙台第二高等学校同窓会会員一同、並びに教職員一同、皆さんのご入学を心からお祝いし、本来の真の自己探求に励み、心の奥深くにある「自分自身、自己」に限りない信頼を寄せ、「ローカルな地域社会」と「グローバルな地球社会」の一員として、ハイブリッドに取り組み、人間として成長、そして貢献なさを祈念し、祝辞といたします。

令和四年四月八日

宮城県仙台第二高等学校同窓会

会長

佐藤一郎

